様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月１日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：平成 21 年～平成 23 年
課題番号：２１５２０１２３
研究課題名（和文）古代ギリシアの音階理論のローマ帝政期における展開

研究課題名（英文）Development of the Ancient Greek *Harmonike* in the late Roman period

研究代表者　山本建郎
（Yamamoto Tatsuro ）

研究者番号：３０００６５７２

研究成果の概要（和文）：アリスティデス･クィンテリアヌスの『音楽論』全三巻を翻訳し、詳しい注釈を付した。それによって、これまで不明として不問に伏せられていたいくつかの点に決着をつけ、古代ギリシアの音階理論のほぼ全容を明らかにした。

研究成果の概要（英文）： I have translated Aristides Quintilianus' *Peri Mousikes* (Three Volumes) into Japanese, making some detailed commentaries. Doing so I have decided some historically questionable points and made clear totally the Ancient Greek Theory of the Music.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成２１年度	1,300,000	390,000	1,690,000
平成２２年度	1,500,000	450,000	1,950,000
平成２３年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術誌･芸術一般
キーワード：音楽学

１．研究開始当初の背景

当研究者は修士論文以来アリストテレスの形而上学、自然学を研究課題としてきたが、アリストテレス自然学の実質的な展開として音階理論(ハルモニア論)の究明に転じ、平成 12 年度に出版助成金を得て『アリストクセノスハルモニア原論の研究』を出版して以来、一貫して古代ギリシアの音階理論のその後の展開を追っている。その間二度ほど基盤研究（C）の助成金に与り（平成 13-14 年度、16-17 年度）、プトレマイオスの『ハルモニア論』全三巻におけるトノス論(旋法理論)を解明した。

これによりヘレニズム・ローマ期の理論状況の大勢を把握したわけであるが、アリストクセノスの理論の波及状況はいまい

ち分からない点が残る。それは、ヘレニズム・ローマ期の理論家たちの趨勢がピュタゴラス派の影響の下にあるために、アリストクセノスは否定的な文脈で語られることが多いからである。

そこで、アリストクセノスの理論を祖述していると評されているアリスティデスの『音楽論』全三巻の分析が最後に残された課題となる。アリストクセノスはアリストテレスの弟子であったから、アリストクセノスの理論も哲学全般の理解の下に為されるはずである。アリスティデスは折衷派の哲学者とされている処から判断して、当時の哲学的な議論の実情を知る適切な文献になると見込まれた。

アリストクセノスの影響下にあるローマ期の理論家としては、もう一人『エンティキリオン(音楽提要)』の著者ニコマコスがいる。アリスティデスの理解をニコマコスの理解と比較検討することも、今回の研究の背景にある課題であった。こちらは比較的短くて要約的な叙述形式で書かれているので、併行して読んで行けることが予測された。

2．研究の目的

古代ギリシアの音階理論の系譜の最終段階に位置するアリスティデス･クィンテリアヌスの『音楽論』を哲学の視座も入れて総合的に理解して、一連の系譜の総括とする。この大目的の下にテキストの読解に着手したのであるが、それぞれの巻における主題が独立していることがすぐに判明したので、それぞれの巻における研究者としての方法論的な対処姿勢を決めて、まずそれぞれの巻を別個の方法論的な対処姿勢の下で読解を試み、それぞれの目的を設定した。即ち、

第１巻については、著者の意図がアリストクセノスの理論の解説であることに鑑みて、アリストクセノスのテキストとの比較考証を試みて、理論の展開の意味を追求することを目的とした。

第２巻については、そこにおいて著者が音楽の教育的な効果を論じていること、そのために古典的に定評のある作品に照準を合わせてろんじていることに鑑みて、著者の意図が古典作品(主としてホメロス)の読み方にどのように反映しているかを探ることを試みることを目的とした。

第３巻については、そこにおいて著者が音楽の自然学的な意味を論じていることに合わせて、著者が提起する自然学の主題(天体現象、性差現象、音響現象等)がどのように音楽的に意味づけされているかを理解することを目的とした。

このように、大目的は当初の音階理論の総合的な統合を明らかにする点にあったのであるが、読解の過程で小目的を設定せざるを得なくなり、その意味では変更を来たしたが、かえって当時の哲学的な視座からの音階理論の意味づけを歴史的に究明できることが予測され、研究目的だけでなく、研究内容そのものについても具体的な肉付けが期待された。

ニコマコスの『音楽提要』については、当初の予測通り、『音楽論』第１巻との比較考証の結果、アリストクセノスの理論の基盤を明らかにするという当初の目的は果たし得た。

３．研究の方法

研究方法の大綱はアリスティデス『音楽論』全三巻を翻訳して、古代ギリシアの音階理論を哲学的な背景から理解することである。そのために、まず、テキストの逐語的な読解に専念した。

テキストの読解は、上記の「目的」の項に示したように、それぞれの巻に応じて別々の方法論的な態度で為された。即ち、

第１巻については、純粋に音階理論の検討の問題関心の下に、アリストクセノスの理論との比較検討が為された。ニコマコスの『音楽教程』の読解も、この検討の大きな一助となった。

第２巻については引用されたホメロスのテキストを検討して、そこからどのような教訓を得ているかを考察した。音楽の教育的効果については、当時のエートスの問題であるとして、テキストの文言から当時の一般的なエートスの抽出に努めた。

第３巻については、当時の知識人の一般的な自然認識の方式を抽出して、それが音階理論の理解にいかに影響を与えているかを考察した。

４．研究成果

『音楽論』全三巻の翻訳は完成した。詳しい注釈を試みる過程で数々の新たな知見に達した。

第１巻については、アリストクセノスの音階理論の欠落部分もしくは意味の確定の困難な箇所の判定基準として不可欠の証言となっているとの確信に達した。

まず、音階構造について、最初期と古典期でははっきりとした違いがあり、最初期の素朴な民族音階的な特徴が古典期においては洗練され、さらに単一化された跡がはっきりと示された。

トノスに関しても、その記述から旋法の差異を消去する方式が示唆されていて、新たな思想的展開の契機となった。この変容は、アリストクセノスによる旋法的エートスの否定として大問題を残すのであるが、その否定を積極的に解釈する当研究者の見解にとっては大きな判断根拠となった。

また、リズムにかんする部分はアリストクセノスのテキストの大部分が散逸しているだけに、該当する章はアリストクセノスのリズム理解に関する貴重な証言である。当箇所を典拠にして、リズム論にかんしてもかなりの復元が可能となった。

ニコマコスの『音楽提要』については、ニコマコスがピュタゴラス派に属するとされているだけに、アリストクセノス系の発想との融合の可能性が見出され、理論上も新たな体系の可能性も示唆された。体系の試論的構成には至らなかったが、大いに知的関心を誘発せしめられた。

第２巻においては、ヘレニズム・ローマ期における音楽的エートスの古典期からの変容がかなりはっきりと知られ、有意義であった。ホメロスからの引用箇所についても、アリスティデスの主張部分と照合するとホメロスそのものの意味からのズレもかなり認められ、ヘレニズム・ローマ期の知識人の古典理解の偏差がはっきりと知られた。音楽史的にはさほど大きな知見にはならなかったかも知れないが、古代末期のエートスの変容に関しては、はっきりとした定言が得られた。

第３巻は一見当時の迷信的な自然現象了解が並んでいるかに見えて、近代科学の視座からすればほとんど問題にならないとも思われるが、そこが精神史・理念史的に言って興味の焦点になる処である。自然現象についての様々な意味づけは、当時の平均的な知識人の様々な自然観が混在したままはっきりと表明されていて、当時の自然観のパノラマを呈している。

その好例は、天体現象の意味づけである。太陽と月と五つの惑星を神話上の神々に対応せしめ、そこからそれぞれの天体の発する音響を延々と説く叙述は近代科学の視座からすればでたらめの極致とされようが、そこをそれぞれの天体の観察された相として読み直して、当時の平均的な知識人の自然現象了解の一例として捉えるならば、恰好の歴史的な証言となるのである。本研究の成果の一面は、当時の平均的な自然観察状況の摘出にあると言えよう。しかるに、それが音響現象に結び付けられて音階理論の基盤に据えられると、状況はさらに主題的に深まる。議論は一見荒唐無稽な戯言に見えるが、理論の特徴に対応せしめて解釈すると、荒唐無稽なこじつけと見えた見解によって示唆されていると解釈される音階の特徴が見えてくるのである。テキストのこのような読解は当研究者によって初めて提起されたもので、このような読み方から音階理論の特質を探りえた点が、最大の成果と言えよう。

テキストのこのような了解方式は天体現象だけでなく、著者が好んで説く性差現象の言辞(男-性と女-性の違いに関する生理的な説明方式)にも現れている。このような性差現象は古典期以来ギリシアの知識人の好んで伝えるもので、類型化さえしていると思われるのであるが、当著者においてはそれが極限的に拡張されているだけに、その示唆する処も比較的容易に読み取られるのである。一見これも荒唐無稽な戯言に見えるかも知れないが、そこから一定の音階に関する思想的な連関を読み取った点も本研究の成果として評価されたい点である。

本巻には、数の神秘思想にかんする合理化を装った見解もかなり見られる。このような点が、一般的に言って、著者が折衷主義的な哲学者とされる所以であろうが、この一見こじつけに見える言辞の示唆する音階理論上の意味も多大である。その点に注目した点も、本研究の独創的な点なのである。

『音楽論』全三巻について全体として評

言すれば、この書物の語る処を文字通りに受け容れれば荒唐無稽であるが、その示唆する処を音階理論と重ね合わせに解釈すれば、その意味は甚大であると言えるのである。この点をはっきりと表明できた点に、本研究の最終的な成果がある。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者　山本建郎

（Yamamoto Tatsuro）

研究者番号：30006572